

中国の役・清水宗治切腹の段

謎の毛利軍の動き

(一)第1の疑惑＝毛利軍は清水宗治を見殺しにしたのか

平成23年10月の全国歴史研究会岡山全国大会は我々岡山歴史研究会が実質お世話をさせていただき、2日目・3日目の見学コース11ヶ所の概要を、大会見学ガイド資料として編纂した。私が主筆を務め起稿したのであるが、その中に高松城址もあり、秀吉の「中国の役」清水宗治切腹の段も書かせて頂いた。東西の陣構えや高松城の地形から見て、遠征軍(東軍＝羽柴軍)より地理に明るく迎え撃つ側の毛利(西)軍の方が遥かに有利なはずなのに、何故秀吉の高松城水攻めを安々と許してしまったのか。改めて通説を再読しても解せないまま大きな疑問として残っていた。信長の本能寺の変による劇的な展開が秀吉を一方的に優位付け、毛利側は殆ど無策で静観し宗治を放置したかに見える結幕だけが強く歴史に残っている。

古代吉備を語る会の第254回の例会は毛利側七城のうち幾つかを探訪した。毛利側のこの局面における小早川隆景が構える前線司令部の本陣は、高松城から西南の日差山、山塊にある鷹巣城である。ここからは眼下に配下の出城や陣地が手に取るように見え、約4km北東には石井山の秀吉本陣もすぐ下に見える。高松城も全く同様である。私は何度か過去にこの地に立って「毛利は何をしていたのか」と憤慨の思いばかり残っていた。今回出宮当会会長の案内で、この高松城での戦いは本来前哨戦で、毛利の本当の相手は織田信長攻略にあり、毛利輝元はもう少し西にある高梁川の支流小田川の猿掛城で待機していた。高梁川と小田川の合流し旧山陽道の接する低地に広がる河川敷を主戦場に想定した作戦で、秀吉に高松城で築堤などの浪費と東軍の出城固めの無駄を誘い込む高等戦術であったとの示唆に富む話を伺って、納得出来た。毛利側の想定では織田信長の本陣もまもなく到着し、秀吉の勝ち戦に押されてじりじり退陣する小早川隆景軍を信長本体が攻め込んで高梁川まで誘い込めば、目先の毛利軍以外の美作などの隠れた毛利の総力で殲滅出来る予定であった。

残念かな、歴史は想定外の方向に展開する。清水宗治の自害までは毛利の作戦通りであった。その証拠に宗治の息子は両陣の見守りの中で毛利側に落ち延び、長州に引き上げた後は家老の一員に遇されて幕末を迎え、新政府から男爵を拝命したと聴いている。宗治の兄で同時に切腹した月清入道の子孫も、この総社の地で代々名士として今日まで繋がっている。子孫の清水男氏の古い蔵には当時の遺品が現存し、子孫は備中国分寺や備中総社宮を代々に渡って支援している史実が残っている。

(二)第2の疑惑＝毛利は羽柴秀吉を抹殺できないで京に帰したのは何故か

秀吉は和議が成立すると、最短のスピードで帰阪に成功する。毛利の追討を守るのは若干九歳の宇喜多秀家とその家臣団だけである。和議を結んだ其の時はいざ知らず、信長の失脚と京での混乱はその後の情報で毛利側も判っていた。秀吉側の戦力は極端に弱っていたと素人でも容易に推測できる。後の歴史を見れば毛利にとって秀吉を遣っ付ける最大のチャンスであったこのタイミングをミスミス逃したのは何故なのか。第2の疑問が沸いて来る。

私は次のように推測し納得した。つまり其れで無くても独裁者としての信長には次なる後継者は育っていない。稀代の家臣はいても武勇派が多く、次を纏める適任者はいない。当分内部のゴタゴタが続く、織田軍団は内部抗争で、自滅するかそうでなくても戦力は分散し弱体化する。それから乗り込んでも十分だし無理は禁物との作戦を毛利輝元や小早川は考えていたのであろう。逃げの秀吉一軍をここで成敗しても、

畿内の織田一族を利するだけだ、秀吉に一つ暴れてもらって、織田の総力を削るのが有効との戦略ぐらいは、私でも判る。毛利の高等戦術はその後の長州藩に引き継がれて幕末を迎える。自分の戦力を保持し耐える時には徹底的に耐える、それが毛利のスピリットなのでしょう。

2012.24.2.6 山崎泰二

参考資料として下記に掲載します。

「全国歴史研究会岡山全国大会 大会見学ガイド資料(山崎泰二起稿分)」

備中高松城址 所在地＝岡山市北区高松 558-2

今年のNHKの大河ドラマに秀吉が登場していますが、彼が織田信長の部将として毛利との戦いをこの備中高松城で展開し、後世に「水攻め」の成功例として名を残します。時は天正 10 年(1582)4月のことです。守るのは毛利方清水宗治(むねはる)率いる城兵 5000 人。人望・義理・思慮共に優れた武将で時に男盛りの 46 才。城の周りは梅雨に入り、ぬかるみで敵兵は一步も近寄れません。平(ひら)城で東西南北の小高い両軍の陣所からは丸見えです。東の石井山に今に残る太閤岩で羽柴秀吉も焦る気持ちを抑えつつ軍師黒田官兵衛の進言を待ちます。官兵衛はこの梅雨の水を逆手に取り、足守川と南の小高い街道(備中松山往来)を利用しての水攻めを進言します。すぐ西の日差山や造山古墳の頂上には小早川隆景を現地総指揮官に 4 万の軍勢を率い、周辺には地元勢が 6 城を連ねて固めています。それに対し秀吉軍は約 3 万、時は迫っています。本体の総大将毛利輝元は猿掛城にて対峙しています。

石井山の麓の蛙ヶ鼻から旧道(備中松山往来＝微高地)まで約 300m を堰き止めればお城は水で孤立するのです。お城の近くにお住まいで郷土史家の林信男氏は著書の中で、昭和 60 年(1985.6.25)の大雨による洪水の実体験と写真を示し、近くの高松農高生により測量で地形学的に立証されました。(軍記では長さ 2836m 高さ 4m を 12 日間で完成させたとありますが)

秀吉の援軍要請により信長の本隊が京を発った 6 月 2 日の未明、明智光秀は本能寺で信長を自刃に追いやります。すかさず光秀からその情報が備中の輝元に発せられ、運良くその急報を知り得た秀吉は清水宗治＝毛利側と和議を結び、6 月 4 日巳の刻(午前 10 時)宗治の実兄月清入道以下 6 名両軍相見守る中で宗治の時世の句「浮世をば 今こそ渡れ 武士(もののふ)の 名を高松の 苔に残して」と詠み、兄の月清入道も「世の間(なか)を 惜まるる時 散りてこそ 花も花なれ 色もありけん」と詠じて自刃します。有名な場面です。月清入道(清水備後守宗知)の 16 代目の子孫で、総社商工会議所会頭の清水 男(だん)氏が同家に残る貴重な一品を当日披露して頂けます。お楽しみにしてください。先に紹介した林信男氏も体調が宜しければ高松城の現地でお迎えいただけます。

幸運な秀吉は備前の宇喜多秀家を猶子にし、秀家は若くして五大老として秀吉に仕え、地元岡山に後に国宝になる岡山城を築き西国の押さえとします。残念ながら国宝の岡山城は終戦時昭和 20 年 6 月 29 日未明の空爆で焼失してしまいました。清水宗治の子孫は幕末まで毛利の家老として重用され、明治政府から男爵の爵位を受け、そのご子孫は続いて今日に至ります。宗治の正義は末代まで残ったのです。今年も 6 月 5 日に末裔の清水典子(74 歳)氏をお迎えして関係者 500 人で「宗治祭」が催されました。